

上海日本人学校虹橋校における在外教育施設の実態と学年運営

前上海日本人学校虹橋校 教諭

神奈川県横浜市立本牧南小学校 教諭 長 井 将 吾

キーワード：現地理解教育，教科外指導，学年運営，教科指導

1. はじめに

在外教育施設から帰国して転入してくる児童が多い横浜。そんな子どもたちを担任する機会に恵まれ関わっているうちに、これからは世界で活躍できる子どもたちの育成をしたいと願った。今回は、世界一の経済都市で、横浜の友好都市でもある上海における、私の3年間の貴重な体験を紹介する。

2. 在外教育施設の特徴

当たり前の話であるが、在外教育施設は日本国内にはない。国外にある。上海は日本人が多く生活しており、日本語だけで生活しようと思えば可能だ。しかし、多くの場面で、ここは日本ではないということを実感させられる。以下、学校現場における国内との違いを見ていきたい。

(1) 転出入児童が多い

上海という経済都市のためであろう、上海日本人学校虹橋校は1500人を超える世界最大規模の日本人学校である。また上海には、小学校が合わせて2校、中学校1校、高等学校1校がある。子どもたちは、保護者の転勤等によって転出入を繰り返している。1学年は9クラス。1クラス30人の大所帯である。4月に1年7組を担当したとき、当然30人なので出席番号は30番までであった。しかし、年度末には人数は変わらないが、出席番号が39番までとなった。つまり、転出が9人、転入が9人だったということである。私のクラスは特に多かったが、他のクラスも10人前後の入れ替わりがあった。これは、学年が上がっていくにしたがって減少していくが、どの学年でも同じようなことがある。そのため、日本と同じように1年間、ほぼメンバーが変わらないという状態での学級経営とはいかない。クラスがまとまるように、行事一つ一つが全て真剣勝負であった。

(2) 1000人を超える児童の登下校がバス通学

児童の登校は、基本的に2種類に分けられる。保護者付添い徒歩、または、バス通学である。上海日本人学校には通学安全部（以下、通安部）なるものがある。日本でいえば校外委員会であろう。公務分掌が通安部主任となると、2年間は他主任の仕事は回ってこない。それだけ、子どもたちが毎日安全・安心して登下校できるように配慮する必要があるからだ。またPTA役員や校内現地スタッフと連携して、接触事故が起きたときや渋滞等で遅くなったときには細かな配慮が必要となった。バスの運転者やバス内を見守るスタッフも現地人であるため、必要最低限の言語習得は欠かせない。



バスで下校する児童

(3) 工夫が必要な教科指導

低学年の生活科や中学年の社会科などは、地域に出での活動が限定されているためとても難しい。1年生では

どんぐりの木群がバスで1時間ほど行った余山という地域にしかない。2年生では、まちたんけんができず、自分の住んでいるマンション内や地域を調べてくる程度。3年生では通訳できる保護者の方や現地スタッフに助けをもらいながら、学校から数百メートル圏内のまちたんけんにとどまる。国内では当たり前に行える活動ができないことも多かった。それでも担当学年の先生方は、日本に帰国した時に困らないようにと工夫しながら指導されていた。

ハード面での工夫としては、全教室にプロジェクターが常時設置されていたり、パソコンが校内LANで繋がっていたり、とても使いやすい環境にあった。また、体育館にエアコンが整備されていたり、インドアプールがあったり、運動場全面が芝生であったりした。PM2.5対策として、全教室に空気清浄器の設置もされていた。

(4) パスポートが必要な体験学習・修学旅行

日本人が中国で施設に宿泊する場合は、大人でも子どもでも必ずパスポートが必要となる。

5年生は東方緑舟にてキャンプファイヤーやオリエンテーリング、野外炊事などを体験する。宿泊施設自体が当然中国管轄下にあるので、日本との関係が政治的に良好でなくなると利用が難しくなる。旅行代理店の現地スタッフの力が大変に大きなものとなる。

6年生の修学旅行。新年度スタートの4月初旬の段階では、例年どおり首都・北京の予定で下検分も3月中に終了。しかし、大気汚染と鳥インフルエンザの問題が重なり、最終的に北京への修学旅行を断念せざる得ない状況になった。そこからは、通常勤務に就きながら、数日後の週末には新たに下見を行うというハードスケジュール。修学旅行地の選定に関しては、旅行社との連携も密に取りながら計画した。その結果、5月末に出発予定の修学旅行先が4月中旬に決定。ゼロからのスタートであった。残された時間は約一ヶ月半。修学旅行先は、香港・マカオに決まり、この段階から旅行日程などを一から組んでいくという作業に入った。

学年全体で6学級、約200名の児童は、一機の飛行機で同時に目的地の香港国際空港に向かうことはできず、時間をずらして、第1団（1組～3組）、第2団（4組～6組）の2グループに分け、旅立った。

3日間の活動の中で、一番配慮を要したことは、児童の安全・健康面はもちろんだが、200冊を超えるパスポートの取り扱いだ。各イミグレーションの前でクラス全員分のパスポートや出入境・出入国カードを配布し、通過すると、またクラスごとに集まって回収する、という一連の流れを8度も繰り返した。日本籍や中国籍・香港籍や台湾籍の児童それぞれで通過内容も異なるため、全児童のパスポート内容やビザなどの書類を綿密に調べてから当日に臨んだ。保護者の勤務先等でのビザ更新の時期とも重なったため、出発ぎりぎりまでパスポート内容の確認作業をおこなった児童もいた。日本国内とはひと味もふた味も違った修学旅行を0から計画することができたのは非常に意義のあるものとなった。

(5) 現地理解教育

各学年で現地校との交流がある。お互いの学校を行き来し、日本の遊びを紹介したり、歌やダンスを披露したりする。年に1度か2度ではあるが日本代表という意識で子どもたちと共に取り組む。また、PTA主催の中国文化体験もある。中国ならではの、雑技団体験・花文字・刺繍・影絵・京劇・中国武術などである。どれも子どもたちにとっては楽しみな時間であり、PTA役員の方々が力を合わせて運営されるととても素晴らしい活動である。

(6) レベルの高い医療

上海の医療技術は世界的に見ても進んでおり、現地で予防接種を受けることも、病院を選んで受診することも可能な地域である。しかも、日本語が通じる場合が多い。しかし、緊急の場合はそれが成り立たない。まず、救急車が到着するまでかなり時間がかかり、渋滞に巻き込まれる可能性が非常に高い。また、とても高額な医療費がかかる上に、中国語か英語しか通用しない。自分の身は自分で守ることを常に念頭に置いて生活することが大切である。と同時に日本国内においては、各地方行政によってかなり手厚く保護されていることを実感した。

上海では日本人学校ということで、国内と同じように学校医さんも決まっており、それは通学させる保護者にとっては頼もしい事だと感じた。

3. 学年経営

(1) 学校教育目標「独歩博愛」

1500人を超える大規模校のため、学級数も多い。1年生は10クラスから、6年生は6クラスと全学年で50クラスとなる。その中で、学年主任を中心とした学年経営というものはとても大きな責任が問われる。3年間在籍した期間に数多くの学年主任から勉強することができた。どの先生も日本全国から派遣された力のある先生方ばかりである。毎朝の打ち合わせを7時半より行い、毎週水曜日には学年研を行い、常に学年内の学習状況や子どもたちの様子を把握し、学校教育目標「独歩博愛」の精神に基づいた子どもたちの育成を図っていた。同時に、経験豊かな文部省派遣の教員と財団派遣で経験の浅い教員とが助け合い、尊重し合い、仲間としてどう学年を創りあげていくかを常に意識していた。



組体操の練習

協送力（学年大玉ころがし集会）

今日総力（運動会）

協聡力（学年クイズ集会）

協奏力（学習発表会）

競走力（徒競走）

などである。

(2) 学年テーマ「協創力」

そのための一つは、学年の教員、子どもたちが常に念頭に置くテーマを掲げることだった。「協創力」（協…子ども、保護者、教員。創…はじめる、つくりあげる）という意味を込めると同時に、学年での行事やイベントをたくさん行った。一つ一つ子どもたちと共に創りあげていく時間を大切に、楽しんで取り組んだ。日本と違い、地域力というものはないに等しいためである。全てが「協創力（きょうそうりょく）」につながるように考えた。

(3) 学年内研修

また、学校内の研究にとどまらず、学年内での自主研修も積極的に行った。校内研究は、研究部が中心になって進めているが、大所帯のため基本的に学年で進めていくことが多い。国内とは違って、他校の先生方との研究会の場はほとんどない。校内の研究に加えて隔週で行う自主研修（互いに研修を持ち寄る）で子どもたちの成長や指導、自分たちのスキルアップを図った。

4. おわりに

上海という地に初めて降り立ったときの、ふわふわしていた感じを今でも覚えている。外国で3年間生活するということがどれだけ大変かを頭では理解していても、実際に経験するのとは大きな違いがあることを身をもって知ることができた。そして、上海で目の当たりにした他の先生方の考え方や指導をこれからの自分に生かすことが、将来の日本を支える子どもたちのためになると思う。私は現在、それを自覚しながら教壇に立っている。上海の地で出会った多くの人々に本当に感謝したい。謝謝。